

3 内容項目を重点化し、総合単元的に扱った実践例

① 附属小学校が大好きだよ

小学校 第1学年 宮里 智恵

(1)総合単元設定の理由

小学校は1年生の子どもたちにとってたくさんの異学年や大人の人々と生活する初めての大きな集団生活の場である。子どもたちはそれまで経験したことのない大きな集団の中で大勢の人々とかかわりながら生活することに対して期待と不安をもっている。

1年生を迎える小学校の側は、1年生の不安感を少しでも和らげるために掲示物や花壇などにさまざまな工夫をする。こういった物的環境を整えることは1年生にとって喜びと楽しさをもたらすものとなっているが、それだけで1年生の子どもが安心して学校に来ることができるようになるわけではない。人が新しい環境の中で安心して自己を発揮することができるようになるためには、そこで出会う人々との温かい関係が育まれることが必要である。小学1年生の1年間、子どもたちは自分を取り巻き大勢の人々と直接かかわる体験を通してその人々の存在に気づき、その人々が自分に向けてくれる温かい思いを感じる中で、本物の安心感をもつようになることを考えるのである。

本実践はこういった小学1年生の状況を人とかかわる力を育てる好機ととらえ、「附属小学校が大好きだよ」という単元を設定して、子どもたちが身の周りの人の存在に気づき、その人々への親しみと附属小学校への愛着の気持ちを醸成することをねらいとして行ったものである。

T:こんな手になってハンスはデューラーを責めるわけでもなく「デューラー、平気だよ。絵を描くことはできないけど、鍛工所の仕事は一流なんだぞ。」とって笑ったんです。ハンスはどんな気持ちで言ったの、でしようね。

P:自分はもう絵を描けないけど、デューラーは評判のいい画家になつてきたから、がんばって。という気持ちだと思えます。

P:自分が画家になれなかったことはくやしけれど、デューラーが画家になってくれたからちょっとうれしかったんだと思えます。

P:デューラーががんばっていると感じて、自分も仕事をがんばったから、それでちゃんと自分が信じたように画家になって戻ってきてくれたから、それはそれでいいんじゃないかなあ。

子どもたちは、資料後半のハンスとデューラーの姿を知って、葛藤を乗り越えて友達を信じる強い意志と二人の絆の深さに感動していた。終末で書いた感想文には、友達を最後まで信じて行動したハンスの行いのすごさやすばらしさに驚き、自分も友達を信じる力を持ちたいという思いを述べた記述が数多く見られた。

⑥授業をふりかえって

日常生活の中で友達との関係づくりに悩む子どもたちの実態に対して、子どもたち自身が自らを振り返り、今後に向けて指針を得ることができるよう人物が描かれている資料を探した。授業では、登場人物の気持ちの動きを丁寧に辿りつづ、友達を信じることにについて考えが深まるように、「本当にこのような生き方ができるのだろうか」と繰り返し問うた。それによって子どもたちの思考は播さぶられ、自己の生き方と対峙させることができたように思う。子どもたちは今後、いろいろな人と出会う友人関係を築いていくことになるが、このような1つのモデルが、よりよい人間関係を結ぶ礎になつてくれることを願いたい。

本稿ではその単元の中の2つの実践について述べる。

実践例1の「さわやかやが班みんなの気持ちを感じよう」は、「1年生を迎える取り組み」の1つとして5月下旬に行われた「おむかえ遠足」を題材にしたものである。特別活動領域の「児童会活動」や「学校行事」などと連携した総合単元的な「道徳の時間」の学習を行うことで、1年生に温かくかわった2年生以上の子どもたちの思いを1年生に感じさせ、学校生活への安心感をもたせることをねらいとした。

実践例2の「たくさんの人に出会ってきだね」は入学後8ヶ月を経た時期に、これまでどんな人々に出会い、どのようにかわり合ってきたのかを振り返ることによって、自分たちが安心して小学校に通えるようになったこと
の背景には親しくなった人の存在があることに気づかせるとともに、小学校への親しみの気持ちを一層持ち、今後も学級や学校での生活を楽しく送ろうとする意欲を育むことをねらいとした。

(2)学習計画 全15時間

- 第1次 おむかえ遠足(特別活動・道徳の時間)……………9時間(5月)
- ・おむかえ遠足の準備(特別活動)……………1時間
 - ・おむかえ遠足の実施(学校行事)……………6時間
 - ・おむかえ遠足の絵を描こう(特別活動)……………1時間
 - ・さわやかやが班みんなの気持ちを感じよう(道徳の時間)……………1時間

(実践例1)

- 第2次 わたしのお知り合い(特別活動)……………2時間(7・10月)
- 第3次 たくさんの人に出会ってきだね(道徳の時間)…1時間(12月)

(実践例2)

- 第4次 附属小学校へご招待(特別活動・道徳の時間)…3時間(2月)

・幼稚園さんを迎える計画をたてよう(特別活動)……………1時間

- ・ここが附属小学校だよ(特別活動)……………1時間・課外
- ・幼稚園さんを迎えてみて(道徳の時間)……………1時間

(3)実践例1 「さわやかやが班みんなの気持ちを感じよう」(道徳の時間)

①日 時

平成15年5月29日(金)

②主 題

おむかえ遠足の日の出来事や入学後のエピソードを交流することによって、小学校という新たな場、集団における自己を取り巻く人々の存在と、その人々が自分に向けてくれる温かい気持ちに気づく。 2—(4)

③題 材

「おむかえ遠足の日」(自作資料)

④子どもの実態

小学校への入学時、子どもたちにとっては学校生活の全てが初めてのことであり、戸惑いや不安感を持ちながら学校に来ていた。同じ学級の子どもも同士は日に日になじんでいくことができたが、さわやかやが班(本校の縦割り班)という異年齢での活動には、不安気な表情を浮かべる子どもも多かった。

それでも、入学からひと月を過ぎるころになると、毎日の清掃活動を共にしているさわやかやが班のメンバーとは顔見知りになり、学校という大きな集団の場にも慣れてきた。本実践の事前調査として、入学からひと月半となる平成15年5月24日に行ったアンケート調査によると、「附属小学校が好きですか?」という問いに対して40名全員の子どもが「はい」と答えている。「附属小学校のどんなところが好きですか?」という問いに対しては、「たくさん遊べる」「勉強がおもしろい」「仲良しの人がいる。」などの答えが多かった。この頃になると、入学当初に抱いていた戸惑いや不安感はかなり少なくなり、安心して学校に通ってきていることが分かる。しかし、そのように

安心して学校に来ることができるのは、自分を取り巻く多くの人々の温かい
かわりがあったからであることにはまだ気づいてはいない。

⑤授業の概要

おむかえ遠足でさわやか班の子どもたちが1年生への温かい思いを中心に
活動したことに気づかせるために、この「道徳の時間」は遠足の日から1週
間後に行った。



導入では、さわやか班遠足の
様子を撮影したビデオを見せ
た。子どもたちは、「あ！遠足
のビデオだ！」「楽しかったよ
う！」などと歓声をあげながら
ビデオを見て、そのときの気持
ちを想起していた。

「あ！ 楽しかった遠足のビデオだ！」

次に、子どもたちが第3次で描いた「遠足の絵」の中から数点をプロジェ
クターで拡大して提示し、それを描いた子どもにも説明を求めらる中で、どの絵
にも自分以外の人が描かれていることに気づかせた。

T：これは誰と何をしているところですか？

P：さわやか班のお兄ちゃんとお菓子の分けっこをしているところですよ。
嬉しかったです。

P：さわやか班のお姉ちゃんたちと海で貝殻を拾っているところですよ。楽し
かったです。

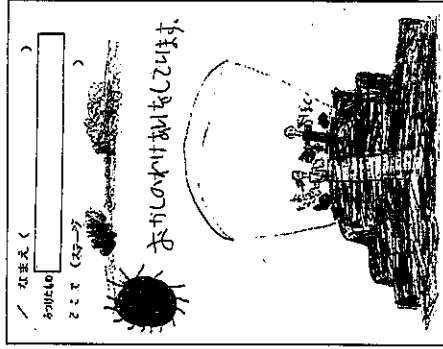


図1 「お兄ちゃんたちとおかしの
わけてくれているところだ
よ。嬉しかったですよ。」

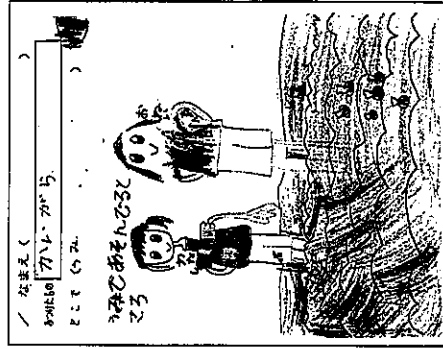


図2 「さわやか班のお姉ちゃんた
ちと海で貝殻を拾っている
ところだよ。楽しかったですよ。」

続いて、遠足の日には仲良しになった人や困ったときに助けてくれた人など
を尋ね、お互いの班のエピソードを交流させるようにした。遠足の日にはさわ
やか班毎に活動するため、同じ学級の子ども同士はもちろん、授業者もそれ
ぞれの子どもの様子をつぶさには知らない。そこで、いくつかの班のエピン
ードを交流させることで、いろいろな人との交流があったことに気づかせよ
うとしたのである。

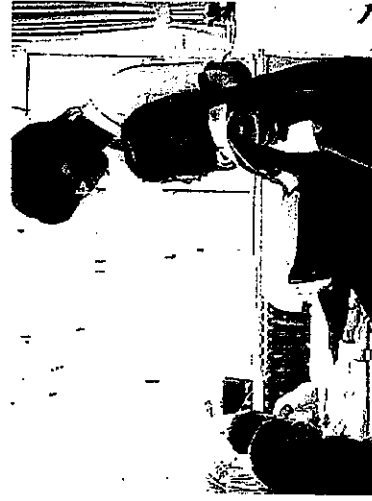
T：誰と仲良しになりましたか？

か？

P：4年生の〇〇さんと仲良
しになりました。

T：何か困ったことがあつて
助けてもらった人はいます
んか？

P：滑り台が怖くて困ってい
お姉ちゃんに助けてもらって大丈夫でした。



たら、5年生のお兄ちゃんが一緒に滑ってくれて滑れました。

P: 船が揺れて海に落ちるかと思ったけど (おむかえ遠足は全校で船を借り切って近隣の島へ行った)、お姉ちゃんがつかまえてくれたので大丈夫でした。

さらに、遠足の日、本学級のある子どもが海辺で靴をなくしたときに、さわやか班の2年生から6年生までの子どもが一緒に探しているところを撮影したビデオを見せ、「このお姉ちゃんたちはどんな気持ちで靴を探していると思いますか?」と尋ねた。自分たちの思いに気づかせたものの発問である。1年生の子どもにとって、自分より年上の子どもの気持ちの想像してみることが容易ではないと思われたが、子どもたちからは次のような答えが返ってきた。

P: (靴をなくして) かわいそうだなあ、と思ってくれていると思います。

P: 早く見つけてあげたいなあ、と思ってくれていると思います。

P: ビデオを見ると○○君 (靴をなくした子ども) は裸足でしょう。裸足で海岸を歩いているんだから、足が痛いだろうなあ、と思ってくれていると思います。

これらの発言は、自分たちが日ごろから大切に思われていることに改めて気づかせてくれるものであった。



「裸足で歩いて足が痛いだろうなあと思っています。」

また、靴をなくした子どもが「靴はお兄ちゃんが見つけてくれたよ。見つかってうれしかった。」と発言したことで、年上の人から温かくかわわってもらってうれしいなあという気持ちを共有することができた。

続いて、あるさわやか班のイ

ンタビュービデオを見せた。これは、遠足の前日に撮影しておいたもので、お迎え遠足に向けた思いを2年生から6年生までの子どもたちに語ってもらったものである。ビデオの内容は、

○ 港に着くまでの道で、「迷子にならないように、声をかけてあげたいです。」

1年生さんが賑ばないように手を引いてあげたいです。

○ 船の中では、風で帽子が飛ばないように注意してあげたいです。

○ 迷子にならないように、声をかけてあげたいです。

○ 荷物が重くて歩けなかつたら、荷物を持ってあげたいです。

など、どの言葉にも、1年生が初めての遠足を十分に楽しめるようにとの思いが込められていた。

このビデオを見た子どもたちは、授業者の「みんなの班のお姉ちゃんやお兄ちゃんたちも、こんな気持ちで遠足に連れて行って行ってくれたんですね。ビデオを見てどう思いましたか。」の問いかけに、一様に「やさしいなあ。」「うれしいよ。」と語った。遠足の日が楽しかったのは、自分を取り巻くいろいろな人々の温かい気持ちとかわわりがあったからなのだ、と気づいていったのである。

その後、小学校への入学以来、いろいろな人たちに助けられたエピソードを交流した。これは、おむかえ遠足に限らず、日ごろの生活の中でも温かくかわわってもらっていることに気づかせようとしたものである。交流されたエピソードには次のようなものがあった。

○ 掃除の時にどこをやるか分からなかつただけど、お姉ちゃんに教えて

もらってよく分かりました。

- 5年生さんと宝探しをしたとき、お姉ちゃんが手を引いてやってくれたのがうれしかったです。
- 私が、溝にはまったとき、5年生のお姉ちゃんが靴と靴下を洗ってくれました。

このエピソードは保護者からも特に嬉しかったこととして次のような声をいただいたものである。

あるとき、○○(子どもの名前)が遊びに夢中になって溝に足がはまってしまうました。そのとき、5年生のAさんが保健室に連れて行ってくれ、汚れた靴や靴下を洗ってくれました。汚くて自分で触るのもいやなのに、お姉ちゃんはとっってもよくしてくれました事をととても感激してました。

こうした保護者の声も紹介しながらエピソードを交流した。

授業のまとめとして、入学以来いろいろな人に温かくかかわってもらいながら毎日過ごしていることへの気づきと、これからもさわやか班やその他のみんなと仲良くしていきたいという気持ちを持つような声かけをして授業を終えた。

⑥授業をふり返って

本実践は、小学校という大きな集団に初めて所属した1年生の子どもたちに、自分を取り巻く人々の存在とその人々が自分に向けてくれる温かい気持ちに気づかせることで、学校生活への安心感を持たせることをねらいとした。「おむかえ遠足」という共通の体験を題材にし、その日の様子をビデオや「遠足の絵」で思い出させたり、実際にあったエピソードを交流させたりすることで、子どもたちは、遠足の日の気持ちを生き生きと想起しながら発言していた。また、年上の人たちの思いを、エピソードを元に考えさせたり、実際

のインタビュービデオを見せたりすることで、自分たちが遠足を楽しめたのは、このようにいろいろな人々の温かい思いがあったからであることに気づくことができた。さらに、日ごろの生活へと目を転ずることで、入学以来の毎日の生活も、多くの人々の思いに支えられていることにも気づくことができた。これらのことは、「おむかえ遠足」という学校行事がどの子どもにも共通の体験であったことに加えて、いろいろな方法でその日の出来事を想起させながら、授業の中で共有化していったプロセスが、子どもたちに新たな気づきをもたらしたものと思われる。

(4)実践例2 「たくさんの人に出会ってきたね」(道徳の時間)

①日時

平成15年12月5日(金)

②主題

入学した頃の不安な気持ちと安心して学校にきている現在の気持ちを比べる活動をを通して、入学後に出会った人々とその人々との交流によって生まれた学級や学校に対する肯定的な感情を確認し、今後も学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しく送ろうとする気持ちを持つ。 4-(3)

③題材

「たくさんの人に出会ってきたね」(自作資料)

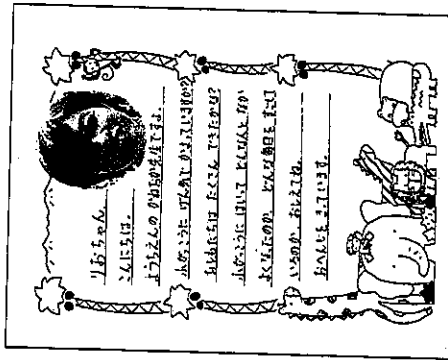
④子どもの実態

子どもたちは入学時には大きな集団に所属したことで戸惑いを感じていたが、月日を経る中でそれにも慣れ、友達や知り合いをたくさんつくって楽しく学校生活を送っている。事前調査(平成15年11月13日 40名)によると、「附属小学校が好きですか?」という質問に対し、40名全員の子どもが「はい」と答えている。そして、「附属小学校のどんなところが好きですか?」という質問に対しては複数回答で52.8%の子どもが担任や友達の存在

を、25%の子どもが一輪車や校庭など物や設備の存在を、22.2%の子どもが行事などの存在を挙げた。また、「2学級（自分の学級）が好きですか？」という質問に対しても40名全員の子どもが「はい」と答えている。そして、「2学級のどんなところが好きですか？」という質問に対しては複数回答で95%の子どもが担任や友達存在を挙げている。

⑤授業の概要

導入においては、一人ひとりの子どもに幼稚園や保育園の頃の先生からの手紙を渡した。手紙の内容は図3のようなもので、子どもたちが小学校への入学後に会った人々などのようにかかわりを深めてきたのかを振り返り、



そのことを手紙の返事に書いて幼稚園や保育園の先生たちに伝えようという意欲を生むことを意図した。



「なんと書いてあるのかな。」

図3 幼稚園や保育園の先生からの手紙

子どもたちは8ヶ月前に卒園してきた幼稚園や保育園の先生からの顔写真付きの手紙を、驚きと共に受け取り、喰い入るように見つめて読んでいた。中にはすぐに机の中にしまい、「大切だから家に帰ってゆっくり開いてみる。」という子どももいたほどである。

手紙をくださった先生たちに入学期後に知り合いかわった人たちのことを返事に書いて知らせようと働きかけたあと、まずプロジェクトで小学校へ

の入学の日のビデオ映像を見せてそのころの気持ちを話し合わせた。子どもからは次のような発言があった。

- ・どんな勉強をするのかなあ、とわくわくしていました。
- ・バスで一人でどうやって帰ればいいのかないと困りました。
- ・仲良しの友達ができるのかなあ、と心配でした。

この中で特に、小学校に入って心配だったことや困ったことがどの子どもにもあったことを取り上げ、入学当初は分からないことや知った人がいないことによる不安な気持ちが強かったことを確認するようにした。

そして、「今でもこんな気持ちで学校に来ているのかな？」と問いかけ、不安な気持ちはいつの間にかなくなり、今では友達もでき、学校が安心できる場所になってきていることを皆で確認した。安心して学校に来ることができるようになった訳を尋ねると、次のような発言があった。

T：こんなふうに学校が楽しくなくなったのは、どんなことがあったからなのか？

P：毎日学校に来たことで、みんなと知り合えて慣れてきたんだと思います。

P：ぼくは入学した頃は〇〇さんと同じ班でいっぱいけんかをしていましたけど、班が変わってけんかをしなくなってなかよく話をするようになりました。

このようにはじめは安心できなかった場所が安心できる場所に変わってきたこと、この背景には「友達がたくさんできたこと」があることに子どもたちが気づき始めた機をとらえて、「入学以来、学校に知り合いは増えましたか？」と問いかけた。子どもたちはそれぞれに入学期後に知り合った友達や年上の人、先生の名前を挙げた。たくさんの人に会ってきたことを、まずは数の上で視覚的に確認させるために、図4や5に示すような「わたしのお知り合い」カードを3分プロジェクトで提示した。これは、子どもたちが7月と10月の特別活動の時間に書いていたものである。

となって……(中略)……(学校は)楽しいです!!

P: わたしがペラペラで転んだときに〇〇さんが助けてくれてうれしかったです。

等の発言が出された。入学後の8ヶ月間には知り合った人たちの温かいかわかりがたくさんあったことが交流されると、子どもたちはそのことを早く幼稚園や保育園の先生方への手紙に書きたいという意欲を持った。そこで子どもたちの顔写真入りのカードを配布し、返事を書く活動に入った。子どもたちは大変積極的に手紙を書き、授業時間を過ぎても書き続ける子どもが多かった。子どもたちが書いた手紙の返事の例を図6や図7に示す。

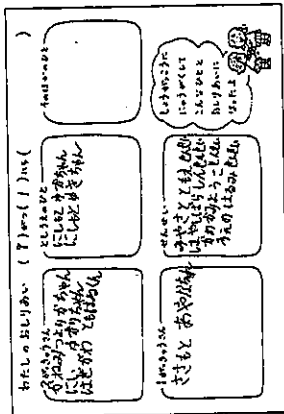


図4 7月の「わたしのお知らせ」

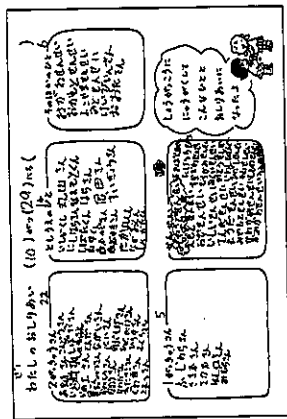


図5 10月の「わたしのお知らせ」

子どもたちは7月に比べて10月のカードには枠からはみ出さんばかりに知り合いが増えていることを見つけた。

続いて、その知り合った人たちはどんな楽しい思い出があるのか、どんなうれしい出来事があったのかを考える時間をもった。言わば質の上でのかわりを問うたのである。子どもたちからは

P: 教育実習の先生たちや違う幼稚園の人たちとも出会えたし、宮里先生とも出会えたことがうれしいです。

P: 友達ができると、休憩とかに遊ぶだけじゃたりなくて、朝、早く学校に来て遊びたいくらい仲良くなりました。

P: たくさんの友達できてからは、早く起きて、朝ご飯を急いで食べて、1つ早いバスに乗って、早く学校に行きたーいと思って……(中略)……〇〇君、〇〇君遊ぼう!と誘って、裏校庭でケイドロ(おにごっこ)とかをして、休み時間が終わると「えー!もう終わり? もっと遊びたい!」



図6 子どもが書いた返事(例)

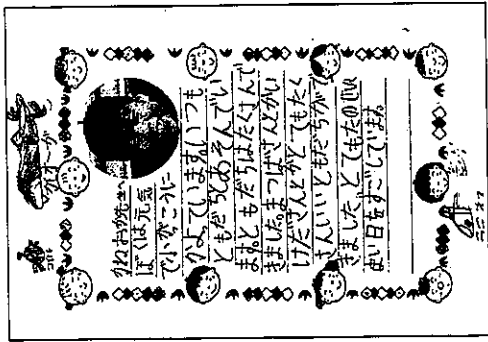


図7 子どもが書いた返事(例)

授業者は後日、これらの手紙を子どもたちの幼稚園や保育園の頭先生の届けた。それぞれの先生方は、文字が書けるようになり表現力も身に付けてきた子どもたちの成長の様子を感じ、大変喜んでおられた。

⑥授業を振り返って

本実践は、入学から8ヶ月を経た時期に行った。小学校という新しい集団

の中で子どもたちなりに努力をして知り合いを増やし、また温かい関係を築いてきたことの喜びを、入学までの時期を支えてくれた幼稚園や保育園の先生方に伝えるという形で表現させようとしたものである。

相手に何かを伝えようとするとき、そこには伝えたい思いと伝えたい内容の両方が必要である。本時は道徳の時間としてのねらいを「学校・学級愛」としていたので、ねらいに迫るための方法として幼稚園や保育園の先生に伝えることにしたのであるが、伝えたい思いと内容をどのように子どもたちに持たせるかに意を用いた。

つまり、学校や学級への愛着の気持ちを子どもから引き出し共有化させていくために、入学式の映像や7月と10月に書きためていた「お知り合い」カードを提示したり、子どもの生活経験を交流させたりする時間をもったのである。

子どもたちが書いた手紙の返事をみると、どの子どもも小学校に入ってからどんな人と出会ったのかかわりを深めてきたのかを紙面によく表しており、これらの方法は概ね功を奏していることが分かる。中には、「今では附属小学校が大好きで、元氣に通っているから安心してね。」「寒い時期なので先生も風邪を引かないで。」などと、相手の先生への気遣いを表現した子どももいた。

このように相手への意識を持つことができるほどに成長してきた子どもたちは、2月には次年度に1年生となる幼稚園の年長児を附属小学校に招待し、小学校での授業の様子や給食時間の様子を見せた。入学時に抱いていた不安を毎日たくさんの人とかかわり合う中で乗り越え、出会った人と温かい関係を築いてきた子どもたちは、その経験を生かして後輩たちに優しく温かく接することができていた。

(5) 成果と課題

1年生の子どもたちも、小学校という未知の場において他者や集団と豊かにかかわる力を身につけていくためには、他者や集団と実際にかかわる体験が必要である。

本単元は、年間を通してそのプロセスを追い、またその体験を価値づけていこうとしたものである。架空のお話などによっても、自分を取り巻く人々の存在とその人たちの思いについて感じたり考えたりすることはできる。しかし、今回のように直接体験したことを題材にすることによって、一人ひとりの子どもたちは、より具体的に感じたり考えたりすることができ、単元のねらいに一層迫ることができたと考える。「道徳の時間」を総合单元的に扱うことの有効性を感じることができた。

1年生の子どもにとっては、1年間に会うことの多くが初めてのことであり、その全てが社会性の伸長に寄与できると考える。今後も、いろいろな機会を捉えて、子どもたちの社会性を一層育てることができるよう、新たな学習開発に取り組みたい。